

# 3年間の歩みから、在宅看護論の授業と実習を振り返る ～実習終了後に行ったアンケート結果から～

From 3-year Step, Looking Back on the Class and Practice of Home Care Nursing  
～From Questionnaire Results After Practice～

光安 梢  
Kozue Mitsuyasu

酒井 康江  
Yasue Sakai

松尾 和枝  
Kazue Matsuo

森中 恵子  
Keiko Morinaka

木室 ゆかり  
Yukari Kimuro

山口 淑恵  
Yoshie Yamaguchi



## 3年間の歩みから、在宅看護論の授業と実習を振り返る ～実習終了後に行ったアンケート結果から～

From 3-year Step, Looking Back on the Class and Practice of Home Care Nursing  
～ From Questionnaire Results After Practice ～

光安 梢 *	酒井 康江 *	松尾 和枝 *
Kozue Mitsuyasu	Yasue Sakai	Kazue Matsuo
森中 恵子 **	木室 ゆかり ***	山口 淑恵 ****
Keiko Morinaka	Yukari Kimuro	Yoshie Yamaguchi

---

キーワード：在宅看護実習、在宅看護論、指導者、教員

---

\* 福岡女学院看護大学    \*\* 日本赤十字九州国際看護大学    \*\*\* 元福岡女学院看護大学    \*\*\*\* 純真学園大学

## I. 緒言

少子高齢社会や生活習慣病の増加、平均在院日数の短縮化や在宅療養を希望する療養者の増加等から、医療提供の場が病院から住み慣れた自宅へとシフトされてきた。

看護基礎教育では、1997（平成9）年に「保健師助産師看護師学校養成所規則等」が改正され「在宅看護論」が新設された。更に2008（平成20）年には、学習した内容をより臨床実践に近い形で知識・技術を統合する「統合分野」に位置づけられ（杉森,2000）、在宅看護の位置づけが、時代の変化とともに益々重要になってきている。

こうした中、本学における「在宅看護論」は、「在宅看護論Ⅰ」と「在宅看護論Ⅱ」を、それぞれ2単位60時間ずつ終了したのち、訪問看護ステーション（以下、ステーション）での実習を2単位90時間行っている。

しかし学生にとって在宅看護は、イメージできる病棟看護と対比し、想像しづらい分野である。だからこそ、興味・関心をもって理解できるよう授業や実習の内容や組立てを工夫しなければならない。また新分野の実習なので、未だそのあり方について論じられ模索中である（臺,2004;樋口,2002;平松,2007;松尾,2013;乗越,2005;渡部,2007）。そこで今回、実習終了後の学生アンケートから、本学における授業および実習について振り返り今後の示唆を得たので、ここに報告する。

## II. 目的

在宅看護実習後に行ったアンケートから、授業および実習について検討し、今後の「在宅看護論」

教育を充実させるための一助とする。

## III. 方法

### 1. 対象および時期

A 大学看護学部看護学科学生 299名(2010年度:98名、2011年度:108名、2012年度:93名)である。アンケートは現場実習終了後の翌日か翌々日に行い、収集期間は2010年8月～2013年4月である。

### 2. アンケート内容

- 1) 訪問件数
- 2) 療養者情報：性別、年齢、主たる疾患
- 3) 経験した看護技術（実施および見学）
- 4) 訪問看護以外での実習経験
- 5) 実習環境、指導体制、自分自身の取組み度、実習満足度
- 6) 実習に役に立った事項

### 3. 分析方法

量的内容分析：マイクロソフトエクセル 2010 を使用し、設問ごとに、回答内容の単純集計（3年度分の累計）を行った。

### 4. 倫理的配慮

調査の趣旨、参加と途中辞退は自由であること、調査結果は統計的に処理をされ個人が特定されないこと、参加の可否が成績評価には一切関係しないこと等を、学生へ口頭および文書にて説明し同意を求めた。なお事前に、福岡女学院看護大学研究倫理委員会の審査を受け承認を得た。

## IV. 授業内容

在宅看護論Ⅰ（2年後期）および在宅看護論Ⅱ（3年前期）の授業内容を表1に示す。

表1 「在宅看護論」授業内容

在宅 看護論Ⅰ	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 訪問看護概論 ～ 社会的背景と歴史、定義と理念、訪問看護の諸制度</li> <li>● 訪問看護対象論 ～ 対象となる個人・家族・地域</li> <li>● 訪問看護展開論 ～ 訪問看護の実際、チームケア、訪問看護過程（<b>演習</b>）、地域ケアシステム、居宅サービス計画（<b>演習</b>）</li> <li>● 訪問看護システム論 ～ 地域医療連携、退院前共同指導</li> </ul>
在宅 看護論Ⅱ	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 訪問看護技術論 ～ 訪問時の面接技術（<b>演習</b>） 在宅ホスピス・グリーフケア、死の体験旅行（<b>演習</b>） 訪問看護技術（<b>演習</b>） 北九州市福祉用具プラザ（<b>見学</b>）</li> <li>● 訪問看護管理論 ～ 経営管理、リスクマネジメント</li> </ul>

## V. 実習概要

実習期間は2週間で、そのうち学内日が、2010年度は4日間、2011年度と2012年度は3日間である。実習の目的・目標および実習スケジュール（2011年度以降）は表2のとおりである。

1グループ2～4名で、同時期に9～11グループが実習を行う。事前学習として、既習知識を復習するための「在宅看護実習ワークブック」（以下、ワークブック）と、実習施設所在地の「社会資源マップ」づくりを、夏季休暇中に取組む。実習初日の学内オリエンテーション（以下、OR）では、訪問看護実習のねらいや注意事項、誓約書の記入、訪問時のマナー、訪問鞆等物品の貸出、実習施設概要と受持ち療養者の情報提供等を行う。

実習中は、訪問看護への同行訪問を主とし、複数回訪問する事例のうち1事例のみを、受持ち療

養者として看護過程を展開する。またカンファレンス（以下、カンファ）は、毎日行うミニカンファと、1週目最後に行う中間カンファ、最終日に行う最終カンファがあり、計画・実施・評価した看護過程等を発表する。フローチャートは、記録物を書くタイミングやそれを提出する時期などが時系列で明記されている。

学内で行われる第一回報告会は、訪問看護ステーション概要について発表し、その施設の特徴や強み、組織としての管理運営について考える機会をもっている。第二回報告会では、既存グループを解体し新しいグループ編成で、経験し学んだことを互いに共有し合い、訪問看護師としての関わりについてディスカッションをしている。

記録物は、学習を助けるツールとして「日誌」「日々の訪問記録」「看護過程用紙」「プロセスレコード」「カンファレンス用紙」等がある。

表2 実習目的 / 目標およびスケジュール

実習目的	地域で生活をしながら療養する人々とそれを支える家族への理解を深め、在宅における看護活動に必要な基礎的知識や技術・態度を学ぶ		
実習目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 疾病や障害を持ちながら生活をする療養者とそれを支える家族を、総合的に捉えることができる。</li> <li>2. 対象者が安全で安心した療養生活を継続するために必要な看護援助について理解することができる。</li> <li>3. 療養者とその家族を主体に行われる在宅ケアシステムについて理解することができる。</li> </ol>		
	曜日	実習場所	内容
1週目	月	学内実習	オリエンテーション・技術チェック・対象者紹介・物品貸出
	火	施設実習	施設オリエンテーション、訪問事例の情報収集・事前学習 訪問（同伴）、ミニカンファレンス、記録
	水	〃	
	木	〃（中間カンファ）	
	金	学内実習	第一回報告会・自己学習・記録物の整理
2週目	月	施設実習	訪問事例の情報収集・事前学習、訪問（同伴） ミニカンファレンス、記録
	火	〃	
	水	〃	
	木	〃（最終カンファ）	
	金	学内実習	報告会準備・第二回報告会・物品返却・記録物の整理・アンケート回答

## VI. 結果

アンケート有効回答率は、2010年度：97.9%（回答数 96 名）、2011年度：91.6%（回答数 99 名）、2012年度：100%（回答数 93 名）であった。

### 1. 訪問件数および訪問事例

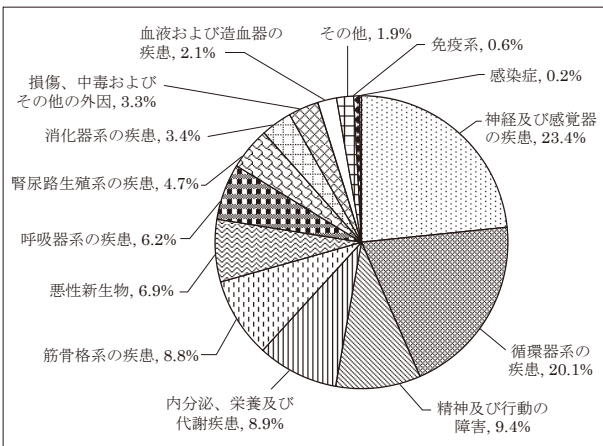
現場実習期間中（6～7日）の、学生一人当たりの訪問延べ件数は平均 13 件で、最少 6 件、最大 23 件であった。

療養者の性別は、男性が約 4 割、女性が約 6 割であった。年齢は 80 歳代が最も多く、次いで 70 歳代、60 歳代であった。

療養者の主たる疾患は、「神経及び感覚器の疾患」（23.4%）、「循環器系の疾患」（20.1%）が特に多かった。次に「精神及び行動の障害」（9.4%）、「内分泌、栄養及び代謝疾患」（8.9%）、「筋骨格系の疾患」（8.8%）と続く。（図 1）

主たる介護者は、「妻」（24.1%）が最も多く、「娘」（20.2%）、「夫」（14.1%）、「独居」（13.9%）であった。

図 1 療養者の主たる疾（事例数 n=2640）



### 2. 経験した看護技術（図 2）

経験した看護技術を“見学”および“実施”に分け集計した。見学・実施ともに「バイタルサイン（以下、VS）測定」が最も多かった。次いで「病状観察」「清拭」「入浴」などの清潔援助、「寝衣交換」であった。またこれらは、見学より実施のほうが比較的多い傾向にあった。

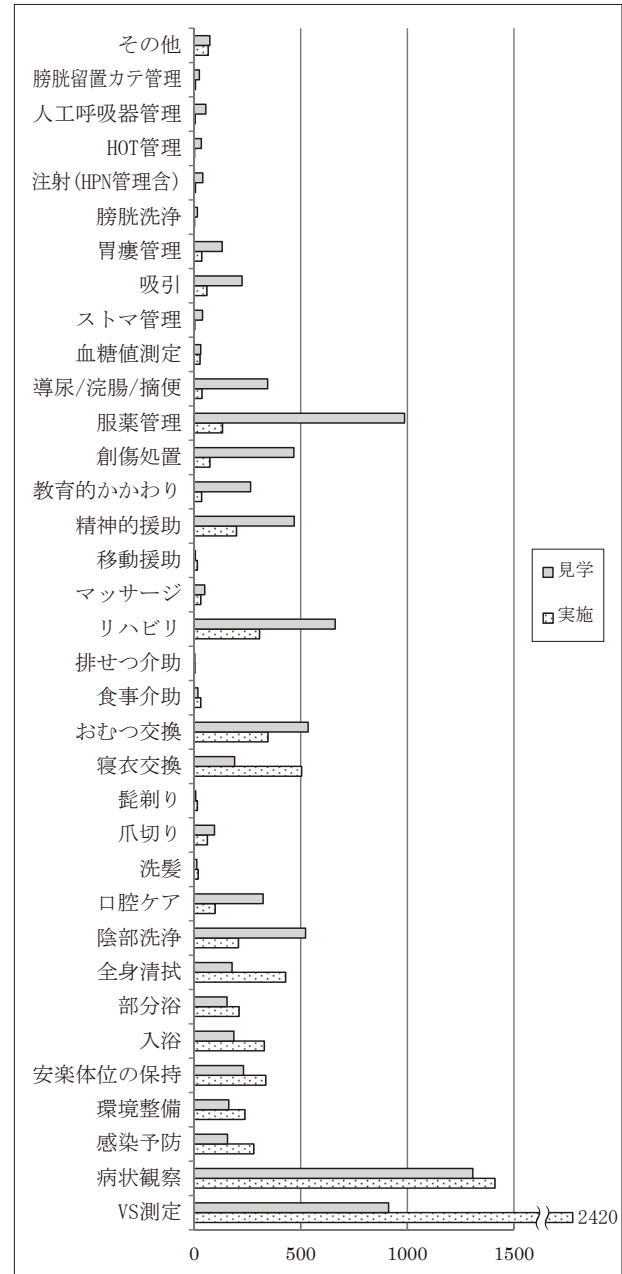
医療的処置を伴うケアでは、「創傷処置」や「服薬管理」「導尿／浣腸／排便」があげられるが、これらは実施より見学することが多かった。

「吸引」「胃瘻管理」「血糖値測定」「人工呼吸器

管理」「膀胱留置カテーテル管理」「HOT 管理」「注射（HPN 管理含）」については、件数は多くないが見学にて学んでいる。

また「精神的援助」「教育的かかわり」も、主に見学にて経験している。

図 2 経験した看護技術（見学 n = 8928、実施 n = 7987）



### 3. 訪問看護以外の実習経験（表 3）

医師やケアマネージャー（以下ケアマネ）など他職種の訪問に同行している。サービス担当者会議や退院前共同指導など、他職種連携場面に同席することもある。またステーションの関連施設（グループホーム等）に、見学に行く機会もある。

表3 訪問看護以外の実習経験

実習内容	件数
医師との同行訪問（訪問診療）	13
ケアマネージャーとの同行訪問（講義も含）	62
ヘルパーとの同行訪問（訪問介護）	12
PT・OTとの同行訪問（訪問リハビリ）	41
サービス担当者会議への参加・見学	40
退院前共同指導への参加・見学	21
社会福祉事業等の講義	10
歯科衛生士による口腔ケアの講義	4
グループホーム等の関連施設見学	78
デイケアやデイサービスの見学・参加	24
訪問入浴サービスの見学	5
特別支援学校・養護学校の見学	2
その他	10

#### 4. 学習環境、指導体制、自分自身の取組み度、実習への満足度（図3）

実習施設の学習環境が良かったかという質問に対して、「強くそう思う」が75.2%であった。「そう思う」と回答した者まで合わせると、96.3%の学生が実習施設の環境の良さを感じていた。気軽に質問や相談できかという質問に対しては、実習指導者（以下、指導者）では90.4%の学生が「強くそう思う」

「そう思う」と回答し、教員に対しては83.6%であった。さらに、適切な指導助言を受けることができたという回答する者（「強くそう思う」「そう思う」の合計）は、指導者では94.1%、教員では77.1%だった。

積極的に臨み自己学習にも力を注いだと自身を振り返る者は、26.2%が「強くそう思う」と回答し、56.7%が「そう思う」と答えていた。学びの多い実習だったと思う学生は（「強くそう思う」「そう思う」の合計）、91.1%だった。

#### 5. 実習に役に立ったと思う事項（図4、図5）

学生は、実習に関すること・授業に関すること、それぞれ上位3つを選択した。その結果、実習に関することでは「ワークブック」（81.1%）が最も多く、次いで記録物の「日誌」「訪問記録」、実習中に行われる「学内・施設OR」や「カンファ」を役に立った（40～50%）と回答していた。学内日に行われる報告会（第一回、第二回）が役に立ったとする者は、20～30%にしかすぎなかった。社会資源マップは、わずか13.9%だった。

授業に関しては、ほとんどが8割に達していないまでも、半数の学生はそれぞれの事項を役に立ったと回答している。中でも、「居宅介護サービス計画作成演習」（64.5%）や「訪問看護技術演習」（67.7%）が高かった。一方、「地域連携」や「在宅ホスピス」「経営管理」を役にたったと回答する学生は10～20%と少なかった。

図3 学習環境、指導体制、自分自身の取組み度、実習への満足度（学生数 n = 288）

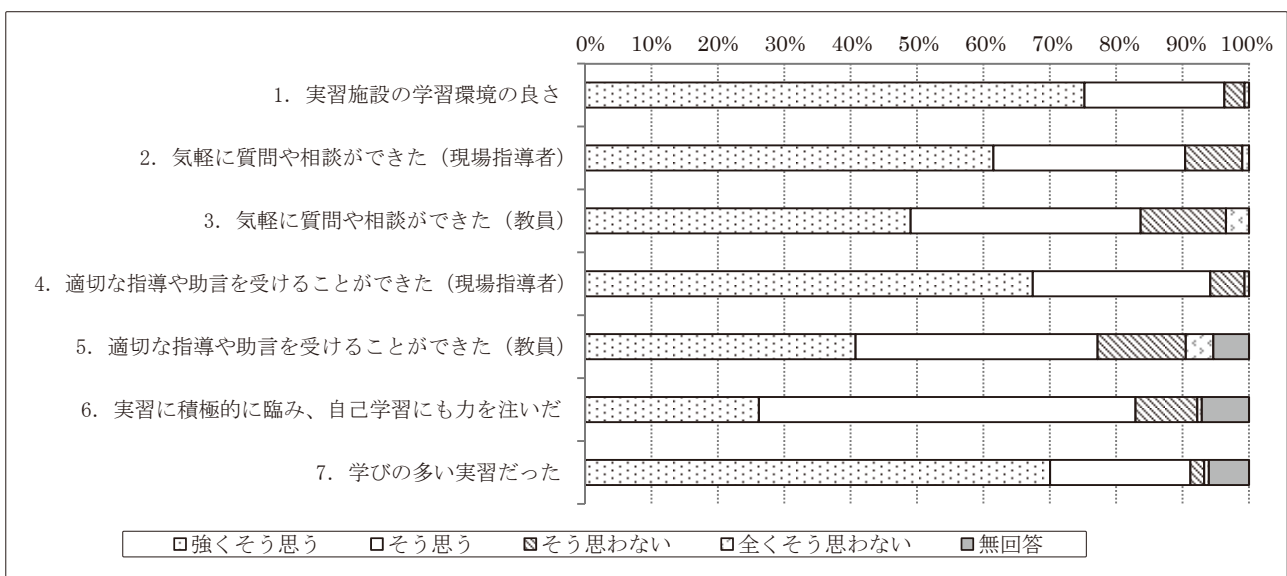




図4 実習に役に立ったと思う事項～実習に関すること上位3つを選択 (学生数 n = 288)

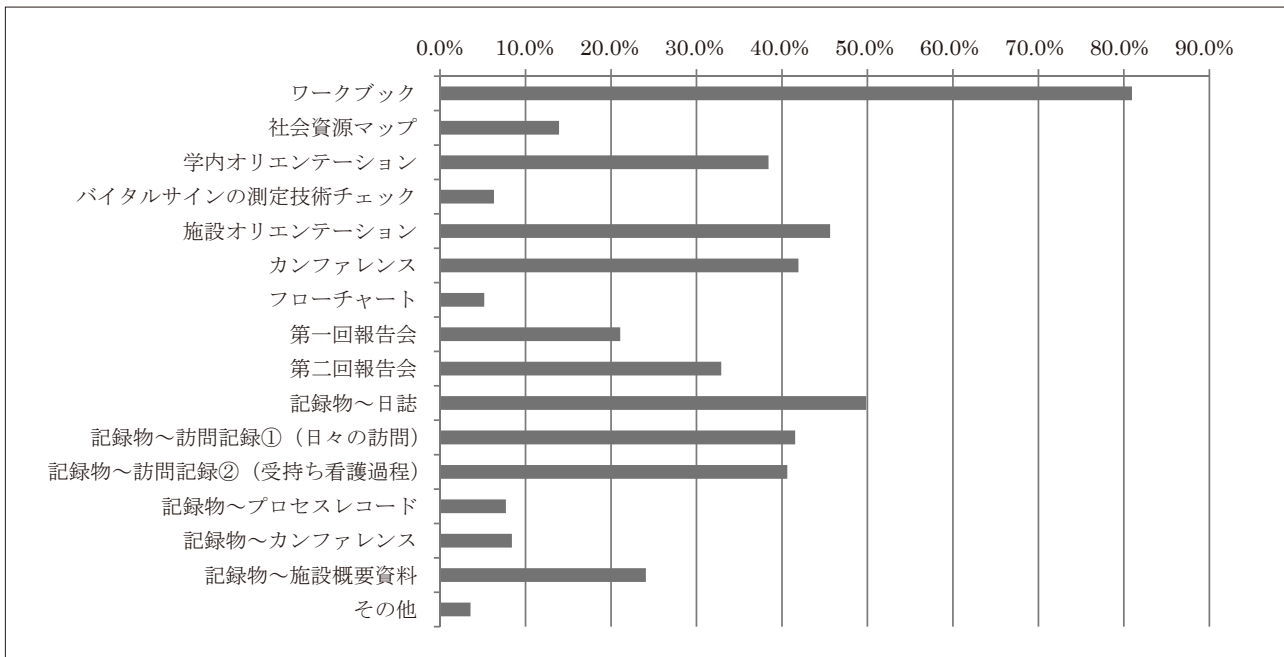
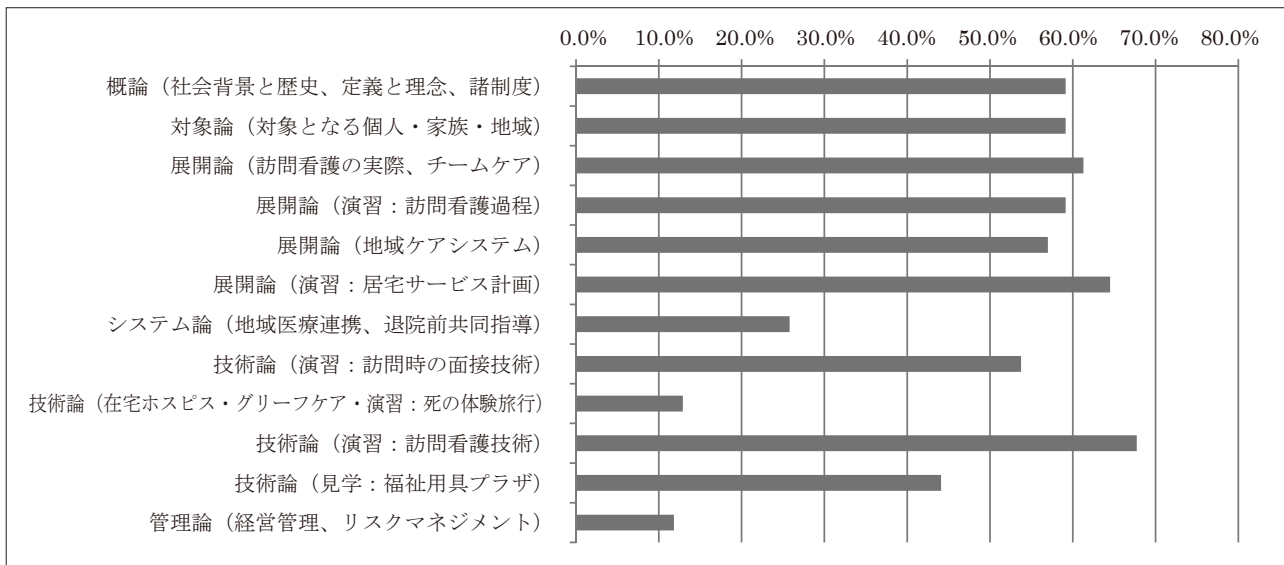


図5 実習に役に立ったと思う事項～授業に関すること上位3つを選択 (学生数 n = 288)



## Ⅶ. 考察

### 1. 訪問件数および訪問事例

平均訪問延べ件数は13件なので、一日平均1～2件訪問していることになる。つまり、午前中1件、午後1件のペースで実習していると思われる。乗越ら(2005)の調査においても同様の結果が得られていた。しかし“訪問看護以外の実習経験”で「訪問診療」や「ケアマネとの同行訪問」など、他職種との訪問にも同行する機会があるので、スケジュール

がやや過密になる時もあると思われる。

学生は、一日の実習の中で、その日訪問する事例の準備や記録の整理を行うとともに、翌日訪問予定事例の情報収集も行う。つまりスケジュールが過密だと、翌日の準備ができなくなり学生は負担は増す。一方ステーション側の事情を考えると、複数の療養者宅が近隣である場合、学生のために一旦ステーションに帰ってくることは時間のロスになる。ステーション側の事情も加味しつつ、学生の学習時間も確保してもらえるよう、今後も現場側と訪問件数の調



整を行っていききたい。

訪問事例の性別・年齢、主たる疾患は、いずれも厚生労働省大臣官房統計情報部社会統計課の「平成22年介護サービス施設・事業所調査結果の概況」(2010)と同様の結果だった。つまり本学における実習訪問事例は、全国の傾向とほぼ変わらないことがわかった。これまでも、全国的な動向を示しステーションの実態を教授してきた(例えば訪問看護技術演習では、主たる疾患上位にランキングされる循環器系疾患に重きを置く等)ので、それは今後も続けていきたい。

訪問事例の主な疾患からは、学生が多種多様な疾患に訪問していることがわかった。健康レベルも、急性期から慢性期・終末期と幅広い。訪問事例の選択について、臺ら(2004)は「訪問看護師は学生の学びに適切な訪問事例の選択をし、その看護実践を通して学生に在宅看護の実際を伝える」と述べていることから、事例選択については今後も指導者と話し合いながら進めていきたい。

渡部ら(2007)が「訪問を重ねていく中で、病棟との違いや、在宅で暮らすことの意味や家族との関係性など、学生は感じ取りながら、看護師としての役割、責任について学んでいた」と述べているように、本実習では複数事例と対面することができるので、学生は療養者各々の生活や家族関係、社会的背景等を考慮し看護展開しなければならない意義や重要性も学ぶことができる。それは本実習のメリットと言えるが、逆に事例の多さが学生の混乱を招き学習を整理できない者もいる。教員は時あるごとに学生らの進捗状況を確認しつつ、学びを導き引出し整理できるよう、質問や助言等していかなければならない。

## 2. 経験した看護技術

見学・実施した看護技術項目で、「VS測定」「病状観察」が多かったのは、先行研究(樋口,2002;松尾,2013;乗越,2005)でも同様の結果だった。そこで今後は“訪問看護技術論”の中で、フィジカルアセスメントを強化する必要があると考える。また「清潔援助」「おむつ/寝衣交換」など日常生活援助では、見学より実施していることが高かった。学生が積極的に実習に臨んでいるあらわれではないかと推測する。

医療的処置を伴うケアの中で多かった「吸引」「胃瘻管理」「血糖値測定」のうち、「血糖値測定」は授業で押さえていないので、今後“訪問看護技術論”で取り入れていきたい。主に見学している「人工呼吸器管理」「膀胱留置カテーテル管理」「HOT管理」「注射(HPN管理含)」については、他の日常生活援助と比べ件数こそ少ないが、前述した療養者の主たる疾患(図1)からもわかるように、医療依存度の高い事例が多いことから、今後も“訪問看護技術論”で教授していく。

## 3. 訪問看護以外の実習経験

医師や理学療法士など他職種の訪問に同行しており、中でもケアマネとの同行が多かった。これは、実習施設であるステーションが、居宅介護支援事業所を併設しており、訪問看護師がケアマネを兼任していることもあるためだ。一人の療養者を、様々な専門家の視点で関われることは広く在宅医療を理解する上で貴重な経験であり、ステーションの役割を考える上でも必要である。またサービス担当者会議等の他職種連携場面を見学できることは、地域ケアシステムの中での訪問看護師の役割を学ぶことができる。

今後益々、他職種連携による在宅医療が必要とされる中、ステーションだけの実習では限界を感じる。また座学のみでは理解しづらい分野でもあるので、今後も可能な限りこのような機会がもてるよう、指導者をお願いしていきたい。

## 4. 学習環境、指導体制、自分自身の取組み度、実習への満足度

指導者や実習施設について、9割近くの学生が「良い」(強くそう思う・そう思うの合計)と回答していたのは、指導者が気軽に質問や相談できる雰囲気を作っているからであり、指導や助言も適切だったといえる。

一方教員に対しては、8割前後の学生が気軽に質問や相談ができた、指導や助言が適切だったとしているが、指導者ほど高い満足は得られていない。今後教員間で、指導内容や指導方法の勉強会を重ねるとともに、指導上の問題点を共有し合うなど一貫した指導体制がとれるようにしたい。

学びの多い実習だったと90%以上の学生が評価する中で、実習を頑張ったと自分自身を評価する学

生は80%とやや低い。そのうち「とても頑張った」とする学生は20%足らずである。今も実習前の学内ORでは、“在宅実習が行えた経緯、療養者宅を訪問できる意味”を考えることで、意欲向上のきっかけを作っているが、今後は時あるごとに、学生を励まし褒めながら緊張を解き、モチベーションを維持できるような関わりを心がけていきたい。そしてほぼすべての学生が「とても頑張った」と回答できる実習を目指していきたい。

### 5. 実習に役に立ったと思う事項

実習に関することでは、約8割の学生がワークブックを役に立ったと答えていた。対象者理解には欠かせない法や制度のしくみを、これにより確認し既習知識を想起していたためだと考える。

「カンファレンス」や「第一回/第二回報告会」について、役に立ったとする者は30～40%と多くはなかったが、これらは学生の気づきを促す上で重要な位置づけである。樋口(2002)はカンファについて「講義で伝えてきた概念を実習で得た具体的事象で確認・検証させる場であり、初めて訪問体験をする学生にとって、教員の意味づけの役割は大きい」と述べている。また平松ら(2007)は、「全体のまとめとして実習報告会を行い、他学生の意見を共有することで学習を深めることが重要」と述べている。このようにカンファや報告会の意義は大きく、そこでの教員の関わりも重要である。意図して訪問場面を振り返らせ、学びを導くための質問や助言を工夫していきたい。

実習記録物は、学生の学びを整理しまとめる上で重要だが、カンファやプロセスレコードの用紙を役に立ったとする者は低かった。これら記録物を書く意義を明確に示し、カンファ等で記録内容を引用しながらディスカッションをするのも解決法の一つではないかと考える。

授業に関することでは、「地域医療連携」や「在宅ホスピス」「経営管理」を除けば、概ね、役に立ったと回答していた。これらについて回答が低いのは、実習中すべての学生が体験できないことと、授業が現場に即した内容になっていないことが原因だと考える。指導者へは体験談を語ってもらい、授業では事例を再考し内容を検証するなど改善をはかっていきたい。

「訪問看護展開論」として行った居宅サービス計画や「訪問看護技術論」で行った訪問看護技術は、実習中、高い頻度で利用できたことから、役に立ったと回答していたと考える。あらかじめ学生が訪問する事例を想定し授業設定していたことが、功を評したといえる。

## VIII. 結語

今後、検討すべき事項について以下にまとめる。

授業については、現場の実情に合わせた講義内容を今後も続けていくが、「訪問看護技術」についてはフィジカルアセスメントと血糖値測定を強化、「地域医療連携」「在宅ホスピス」「経営管理」については、事例を再考し内容を検証して改善をはかっていく。実習については、カンファや報告会等を通じて、学生の学習進捗状況を確認し、学びを導き引出し整理できるような質問や助言を行う。また学習意欲が向上するよう、認め励みながらモチベーションを維持していく関わりも必要になる。指導者と密な話を継続し、体験できない事項に関しては、体験談を語っていただくようお願いする。教員間で勉強会を開き、共に問題点を共有し合う機会もつくる。

以上のことから、今後の示唆を得ることができた。今回、単年度ではなく、過去3年分を評価したことは、全体的な傾向を知る上で有益だったが、経年的変化について言及せず3年分を一括して評価してしまったことは統計上適切ではなく、本論の限界である。今回の結果に甘ずることなく今後も継続し、授業・実習を客観的に評価し、改良を重ねていきたい。

## 【文献】

- 1) 臺由桂, 樋口キエ子, 若佐柳子. (2004). 「在宅看護実習Ⅱ」の受け入れに関する訪問看護ステーションの現状と課題. 順天堂医療短期大学紀要, 15, 28-35.
- 2) 樋口キエ子. (2002). 在宅看護論実習教育内容・指導体制の検討に向けてその①—訪問内容・看護婦に求められるもの・実習で良かった点・困難点から—. 足利短期大学研究紀要, 22, 21-31.
- 3) 樋口キエ子. (2003). 在宅看護論実習における教育内容・指導体制の検討—2—学習効果を高めるカンファレンス方法の一考察—. 足利短期大学研究紀要, 23, 99-102.
- 4) 平松万由子, 松井妙子, 宮路亜希子他. (2007). 在宅看護実習における学習効果—実習形態の相違による比較—. 三重看護学誌, 9, 55-61.
- 5) 厚生労働省大臣官房統計情報部社会統計課. 訪問看護ステーションの利用状況, 介護サービス施設・事業所調査結果の概況. 2010.  
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kaigo/servicee10/>
- 6) 松尾泉, 高田まり子. (2013). 在宅看護実習における, 看護学生の実習経験・評価に関する分析—実習記録からみた訪問看護ステーション実習の学習効果—. 弘前学院大学看護紀要, 8, 25-33.
- 7) 乗越千枝, 小林裕美. (2005). 訪問看護ステーションにおける臨地実習の同行訪問の状況—学生実習記録から—. 日本赤十字九州国際看護大 Intramural Research Report, 2005, 3, 35-44.
- 8) 杉森みど里. (2000). 看護教育学. 医学書院, 東京.
- 9) 渡部良子, 船越利代子. (2007). 在宅看護論実習における学生の学び—「訪問看護ステーションの実習を通して学んだこと」のレポート分析から—. つくば国際短期大学紀要, 35, 141-156.